

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十卷七号（通巻第二三五号）

鈴



くろつけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 235 号

11. 2013

舞踏会

品川 鈴子

長き夜の遠乗りサンバ眠気よけ

逢ふだけで秋思捌ける姉卒寿

誰よりも母にそつくり針夜なべ

鯛無くば鯛で足りる戦中派



着ぶくれと見間違はれる予後肥り

八丈島への船室で寒の灸

マフ刈のプードルも「お手」舞踏会

絨毯に食ひ込むピアノ迎賓館

学童のままの霜焼け北京刀自

ひよどり越深夜は滑るゴム樫



玉

鈴

吟

兵庫 細野恵久

鵜来る列車が列車待ちをれば
菩提子の羽根にその日の運記す
磴の上に満天星紅葉見えて来し
黄落のあとの枝々屈折す
浮世絵の線の細みや秋深む

愛媛 松井洋子

恋の句が誰より得意生身魂
青鬼灯手荒く市に並べられ
夏蝶の翅の欠片となりし朝
クレオメの紅濃く誘ふ夕間暮
洗ひ場より川の気満つる蛍の夜

埼玉 松本清川

初浴衣氷川の杜の能舞台
鰻屋の店を横目に通る過ぐ
大入りの鯉の掛軸夏座敷
想ふこといつばい八月十五日
伝へねばならぬ孫子に原爆の日

兵庫 松村晋

迷ひたる樹林の奥に隠れ滝
朝の川手応へのある鰻籠
金網を越えて南瓜宙ぶらり
揺らされて笑ふ童女のハンモック
水しぶき翡翠一瞬餌銜え

東京 松本アイ

道なりにくねる青田や三角五角
短夜のおしゃべり尽きぬ同い年
籐椅子のいくつか並ぶ喜寿の席
蝸牛じぐざぐ越えて角納む
落し文なんて幻かと恍け

愛媛 松本恒子

滝涸れて一軒残る小商ひ
行く所暇人多し隠れ滝
宿下駄の引き込まれたる盆踊り
語り部の老女母似よ遠河鹿
朱のカンナふいに湧き出づ好奇心

愛媛 三浦澄江

桃すする桃の様なる幼の手
蟻の列すれ違ふ度身を寄する
芋炊きの果てて星降る河川敷
浜木綿の暮れ残りたる港町
山葵田は水音風音鳥の声

兵庫 水野 範子

少し酔ひ無口饒舌二日月
水浴びて犬小さくなる猛暑の日
凌霄花を支へ耐へ来し細き松
路地の土今も昔も鳳仙花
船縁に鵜の出揃ひて船停止

兵庫 水野 弘

汗流す首にタオルの登校児
昼寝覚め電話をすれば人違い
夏休み古里の友雛が増え
老夫婦汗を拭き拭きランニング
行進曲中学校は夏期休暇

香川 三橋 早苗

ひとむらの萩零れたり一草庵
庵にはあちらこちらと蚊遣焚く
椰の葉に裏表なし夏の空
ひとやすみ藪蚊山頭火の笠で
一草庵辞して反転日盛りへ

茨城 三輪慶子

山車舞のおかめひよつとこ雨はじく
御祭礼ごみを集むる人のゐて
信号の黄色点滅山車巡行
町衆の顔の明るさ祭獅子
肩車の子が手を叩く夏神楽

埼玉 向江 醇子

夏の宵オーケストラの魔の力
日盛りに自転車で寝る後の子
中元のお礼の電話東北弁
少しだけ子が注ぎくれるビールかな
夏来れば痩せには痩せの悩みあり

兵庫 村田とくみ

ねだりたる長沓うれし戻り梅雨
噴水に走る子かがむ児口開く子
別校区へ役所の移転暑き道
四分一の西瓜をひとり広き卓
師の逝けり泰山木の花大き

大阪 師岡 洋子

星涼し小さき橋もつ姉の家
運勢のよいといふ日の水中心
茂り憂し猫が頭突きをして去れり
唇に遠き日もどる巴旦杏
天井の木目おそろし盆燈籠

東京 安田とし子

白玉や言はねば誰も傷つかず
為すべきをはたと忘るる花茗荷
失敗談いよ佳境に扇子ひらく
橋脚に水嵩の痕や出水ひく
百歳のこゑの明るき暑中見舞

大阪 吉田光子

囃されてヨーヨーヨイ鉾起きる
我が結ひし御幣もありて鉾巡行
道行きの橋の名数え涼み船
見上げつゝ見下ろされつつ納涼船
大原は赤紫蘇の畑日の照らす

兵庫 明石文字

聞きそびれ歩きつづけし終戦日
炎天下こだわり捨てて神葬祭
遠雷や骨揚げの骨折れやすし
夏盛りキャンパス闊歩の一回生
湧水の噴き出す大地夏の雲

愛媛 足利錠子

土用丑飯事程の鰻井
眩む日々熱中症かと床につく
悔しさの汗と涙や球児の頬
貸農園銀行員が夏野菜
盆の日に親友は黄泉へと旅立ちぬ

兵庫 荒木治代

細格子残る古民家土間涼し
うちわ風昭和の匂ひする茶の間
引越しの荷出しの後のかき氷
宴席の片隅にゐて鮓つまむ
生ビール運ぶ襷の胸豊か

兵庫 荒木 稔

みちをしへ奥の院への岐れ径
係累の少なき墓や苔の花
祭囃子息切り下校せしことも
秋の灯や棋譜を片手に石の音
賽銭のとぼしき堂や秋の蟬

大阪 居内真澄

ロブスター捌く卒寿の晩の夏
改憲を唱へし来賓原爆忌
綿津見の声に聞ゆる土用波
端居して風呂敷肩に髪カット
八月十五日傳ふべきこともどかしく

大阪 池田かよ

涼しき灯つみ重ねられビルディング
猛暑日や夢見悪しと鳴る電話
貸し馬も祓はれてをり山開き
無き袖をたまには振りてメロン買ふ
カンナ赤逢へば別れのあるばかり

兵庫 池田久恵

とまらない止まらなくてよしソーダー水
昼寝覚め豆腐屋喇叭通り過ぎ
去年団扇少し色褪せ風同じ
聞き話す電話の向こう遠花火
お屋敷の朝の睡蓮モネは居ず

香川 石川裕美

日の盛り会話ねじれし母娘
キャンプの夜子等は意地でも寝るまいと
針山に針刺すごとくはたた神
髪洗ふなされるがまま末つ子は
炎昼に尻赤くして滑り台

大阪 石橋萬里

サンガラス心の見えぬ世辞を言ふ
炎暑来て荷崩のごとへたり込む
歳時記の解れ繕ひ土用干
バス停に残暑の影を分かち合ふ
対岸の同じ日傘に目礼す

兵庫 市橋香

海渡る心弾める夏休み
村あげて貸切りバスや夏休み
記録なき酷暑にめげず今朝の秋
新盆や甲種合格ならず生く
夏帽子横浜巡る赤いバス

愛媛 伊藤マサ子

空蟬の目玉と手足衰へず
トーチカの遣りし跡や終戦日
白道を煌煌照らす盆の月
亡き友の満中陰志盆のゆく
遠花火打揚げ終り闇深し

大阪 井上あき子

焦点の合いたる一瞬翡翠翔つ
盆踊り稽古に励む団地妻
サンドレス背の艶めく港町
戦中派は只管黙禱終戦日
蚕豆の曲線女人の背に似て

愛媛 今井忍

母に真似踊つてくれる夏座敷
富士見むと車窓に張り付く遠足子
開け放ち路地より昼寝見られをり
お茶回し飲む草刈りのボランティア
見つめられ撮る百万の向日葵に

兵庫 岩崎可代子

夏霧の晴れてやにはに南部富士
岩手山雲海てふ鏝歩けさう
涼しきは銀山坑夫の切羽跡
遊船の客海猫に手づから餌
新涼のロビーバカラのシャンデリア

鈴の奏

品川鈴子選

金魚の糶三錢・五錢に大和の雨 兵庫 磯田せい子

夾竹桃の白を撫で発つ路線バス

昭和よりムーム―縫ひて子を育て

市章山指呼に飲み干すソーダ水

炎天の道路工事の音響く 兵庫 四葉 允子

夏休み在宅介護手助けも

冷風の吹き出る前で犬投地

盆休み折込み広告一・二枚 兵庫 西 和子

虫干しに批の似合ひし着物掛け

救命法習つて得心猛暑の日

猛暑の日心に叶ふ服が無く

科木の^{しみのき}花の香を知る信濃旅

うすらげる被爆体験蟬しぐれ 兵庫 長江 修司

原爆忌川の流れは変わらざり

あの日から目をそむけたし原爆忌

炎天に訪ね歩きて軍都跡

拍手湧く銚の真木の立ち上がり 大阪 三浦喜久子

裸銚神符祀りて仕上げとす

呉服屋に鎧三体宵まつり

杉本家明かりつつしみ屏風祭

緑蔭に座して苦吟の昼下り 兵庫 先山 実子

亀の子を一会の人と眺めおり

池の面に亀首もたげ夏惜しむ

蟬しぐれ夫の小言は聞かぬ振り 兵庫 遠藤 俊子

不揃いの三角むすび砂日傘

一つずつ舌でころがす桜桃

夏風邪が癒えず丁寧足洗う

初物の西瓜居座る冷蔵庫 大阪 三井 尚美

ガラス戸に鴉ぶつかる日の盛

油照り省略出来ぬことばかり

二の腕が凝る裸子のずっしりに

婿作る冷し中華の天こ盛り 兵庫 内藤 京子

祖母の手の閑かな波紋日向水

炭酸水デッサンスケールより覗く

イーゼルに夏帽子掛け一人ある

歩廊より翻り入るサンドレス

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十句 林 哲夫 評

*選句は全て 品川鈴子

金魚の糶三銭・五銭に大和の雨 磯田せい子

大和の郡山では金魚の糶と出荷が最盛期を迎えて活気づく業者たち。小さくてデリケートな商品は命そのもので扱いが難しい。駄金魚の三銭、五銭の品にも蘭ちゅうのような豪華な鱗を誇る一点ものにも、お天と様は分け隔てなく兩粒を零し、生まれ育った大和の恵みを注ぐ。

冷風の吹き出る前で犬投地 四葉 允子

五体投地と呼ぶ最高の礼法があり、尊者や神仏に対して足元へ身を投げ出す。それと同様の恰好でペットが冷風の吹き出す所を占めて真前にいる。この秋の異常な暑さには文句も言えない構え。

科木の花の香を知る信濃旅 西 和子

科木はアイヌ語で「縛る」の意を持つ、しなのき科の落葉高木で山地に自生、高さ十メートルに達する。

初夏葉の付け根に帯黄色で香りの高い小花を房状につけ花柄の中部に筐状の苞がある。材は器材や経木またはマツチの軸に供し花や果実は薬用。皮は布・紙の原料。信濃は古くには科野と表したそうだ。

原爆忌川の流れは変わらざり 長江 修司

作者の他の句から、原爆投下時に広島におられたことが推察される。それからの激動の年月、日本中でいろいろの物がすっかり変わってしまった。壊滅的な被害を受けた被災の地・広島にあつてはなおさらのこと。それでも、川の流れは変わらず、昔と同じように流れている。作者のしみじみとした感慨と故郷への思いが伝わる。

杉本家明かりつつしみ屏風祭 三浦喜久子

屏風祭とは京都八坂神社の祭礼・祇園祭の宵山で、旧家や老舗において伝来の屏風などの宝物が披露される催し。なかでも由緒ある杉本家の様子である一奥行き深い京の

町屋、明かりを抑えた仄暗い中で、見事な美術品を拝見した作者の感動が分かる。

蟬しぐれ夫の小言は聞かぬ振り

先山 実子

若いころはそれぞれ忙しく過ごした夫婦も、近頃は二人でいることが多くなる。そのため、今まであまり気にならなかった言動が目につき、文句を言いたくなるのもお互い様だろう。ご主人のお小言は聞かないそぶりで見受け流す：まともにぶつからないための賢い知恵。蟬しぐれとお小言の対比がなんとも愉快、ほのぼのとした御夫婦の様子が目に浮かぶ。

初物の西瓜居座る冷蔵庫

遠藤 俊子

夏になると、冷蔵庫はもう少し大きい方が良かったと思うことが多い。筆者の家では丸ごとの西瓜を買うことは少なくなつた。ところがこの句では、冷蔵庫の中に今年初めての大きな西瓜がでんと場所をとっているというのだ。よく冷えたら包丁を入れて、大きな口でかぶりつくのも楽しみなもの。西瓜好きの筆者としてはうらやましい句。

婿作る冷し中華の天こ盛り

三井 尚美

男子厨房に入らずは昔の話。作者のお宅ではお婿さんが料理をなさる。たまには女性陣を休ませようという思いやりのある方なのだろう。でも若くて食欲旺盛なお婿さんの作ってくれたのは量が多すぎて：と作者は思っておられる。てんこ盛りの冷やし中華をテーブルに並べて和やかなお食事、あたたかい御家族の様子が読みとれる。

歩廊より翻り入るサンドレス

内藤 京子

歩廊というのはプラットホームのこと。電車が停まると開いたドアから女性がサンドレスを翻らせて乗り込んできた、というその一瞬の情景である。翻り入るとい言葉で、鮮やかな色や風・女性の若々しいしぐさまで表現して、動きのある句になつた。

寝つくまで母のうちわの風受けて 土 井 蛉夏

夏の夜のひと時、幼子にうちわの風を送る若い母親。ちゃんと寝つくまでとゆつたりうちわを動かせば、幼子は心地よい眠りに入る。作者も母上にこうして寝かしつけられたことがありなのだろう。幼い日のことやご自分の子育て時代のことなどを思い出しながら、その様子を見守っておられる。穏やかな時間の流れが見えるようだ。